連　載

十八世紀からの再出発　　第１９回

ダニエル・デフォー
『ペストの記憶』（１９）最終回

訳　武田将明
Takeda Masaaki

ここで注意してほしいのだけれど、市街地を走る死の車は特定の教区だけを受け持ったのではなく、報告のあった死者の数に応じて一台の車がいくつもの教区を行き来していた。死者をその人の属する教区で処理すべきという縛りもなく、死者の多くは市街地で収容されても郊外の埋葬地に運ばれた。墓場に空きがなくなっていたんだ。

この神の裁きが当初、人びとのあいだでどんなに驚きだったかはすでにお話しした。ここでさらに深刻で宗教的な側面について、この目で見たことのいくつかを披露しておきたい。間違いなく、これまでどんな都市も、少なくともこれだけ壮大な規模を誇る都市ならば、かくも恐ろしい疫病の流行に対して、今回のように無防備そのものだったことはない。行政の面でも、信仰の面でもそれは言える。人びとは実際、まるで警戒も予想も心配もしていなかったようで、その結果、市民を守るための行政の対策といえば、これよりお粗末なものなど想像もできないほどだった。例を挙げよう。

市街地の首長（ロード・メイヤー）と助役たちは、治安を維持する立場でありながら、非常時に守るべき規則を一切定めていなかった。貧民の救済にも無策のままだった。

貧しい人びとを養うための穀物や粗挽き粉を蓄える公共の倉庫あるいは備蓄場を市民は持たなかった。外国でやっているようにこれを準備していれば、まさに最悪の境遇に陥っているたくさんの惨めな家族が救済されたはずだった。しかもそのような救いは、いまの備えでも不可能なのだ。

市街地の金の蓄えについては、ぼくに言えることはほとんどない。ロンドン市庁はものすごく金を持っていると言われていた。ロンドン大火のあと、市庁から大量の金が投入され、公共の建築物を修復し、さらに新しい施設も建てたことからすれば、事実そうだったと結論づけていいだろう。[1] 修復された例としては、ロンドン市庁舎（ギルドホール）、ブラックウェルホール、レドンホールの一部、王立取引所の半分、中央刑事裁判所、債務者監獄、ラドゲートやニューゲートなどの刑務所、テムズ河べりの波止場、浮き桟橋、荷揚げ場の数々。[2] このすべてはペストの翌年にロンドンを襲った大火で焼け落ちるか損傷をこうむっていた。新たに建てられたものは、大火記念塔（ザ・モニュメント）、フリート運河（ディッチ）と

1 大火の年、実はロンドン市の財政は破綻の危機にあったと、**T.F. Reddaway, *The Rebuilding of London after the Great Fire* (reprinted 1951)** を参照しつつ、**Landa** は述べている。また、デフォーの言及している建物の修復には八年の歳月がかかっているという (**Landa 274**)。

それに架かる複数の橋、ベスレム王立病院すなわちベドラム精神病院などだった。[3] しかしどうやら、ペスト流行時の市街地（シティ）の財政担当者は、孤児救済基金に手を出して苦しむ市民に救いの手を差し伸べるのに慎重だったようだ。これに対して翌年以降の担当者は、市街地の美化と施設の再建のためにこの基金を使っている。しかしむしろ前者について、援助を減らされる孤児たちはより意味のある使い道だと思っただろうし、市の行政府の良心が物議をかもし非難を浴びることも少なくてすんだはずだ。[4]

ロンドンを出た市民は、安全のために田舎に逃げたといっても、残された人たちの健康をずいぶん気にかけていて、貧民救済の寄付を惜しみなく続けたのは事実だった。またイングランドの遠い僻地でも、商売の盛んな町では大金が集まった。さらに聞いたところでは、イングランドのあらゆる地方の貴族や紳士（ジェントリ）たちが、ロンドンの苦境を思いやり、貧民救済のために多額の金を市街地の首長（ロード・メイヤー）と行政府に寄贈したそうだ。国王もまた、毎週千ポンドを四つの地域に分け与えるよう命じたという話だった。四分の一を市街地とウェストミンスターの特別行政区（リバティーズ）に、別の四分の一をテムズ河のサザーク側、つまり南岸の住民に。さらに四分の一を特別行政区とロンドンから壁の内側の市街地を除いた地域に、そして四分の一をミドルセックス州とロンドンの東と北の郊外に。もっともいまの話の後半

---

2 ここに挙がっている建築物について、基本的にギルドホール **Mullan** の注に従って解説する。**1411** 年建造のロンドン市庁舎は、**1666** 年のロンドン大火で深刻な被害を受けたものの外壁は残り、**1673** 年までに修復された。ブラックウェルホールはベイクウェルホールとも呼ばれ、市庁舎の東にあり、毛織物の市場だった。**1670** 年代に再建されたものの、**1820** 年に壊された。レドンホールはかつて邸宅だったが、**1400** 年代にその穀物庫で食料や羊毛などの市場が開かれるようになった。大火で屋敷も市場も焼失したが、のちに市場は復活した。王立取引所は **1570** 年創設。大火で崩壊した後、**1669** 年に再開した。面する通りの名から「オールド・ベイリー」とも呼ばれる中央刑事裁判所はニューゲート刑務所の隣に **1539** 年に建てられ、大火で焼失後 **1674** 年に再建された。債務者監獄はウッド街とポウルトリ通りにあり、どちらも大火で焼失後に再建。ラドゲートは市街地の西にあった門で、この上にはリチャード二世の時代から刑務所があった。大火のあと修復されたが、他の市街地の門とともに **1760** 年に破壊された。ニューゲート刑務所は **12** 世紀から存在し、大火で全焼したのち **1672** 年に再建された。(**Mullan 235**)

3 大火記念塔（ザ・モニュメント）はクリストファー・レンとロバート・フックの設計で **1677** 年に建てられた。ロンドンを走るフリート川沿いの建物は大火で焼失し、再開発の過程で川はより深く、より広く改修された。ベスレム王立病院は古い精神病院で、むしろ「ベドラム」(**Bedlam**) の名で知られる。かつてビショップスゲートの外にあったが **1675–6** 年にロバート・フックの設計した新しい建物に移転した。

4 **Backscheider** の注によると、この指摘は事実に基づいている。孤児救済基金とは、孤児の相続した財産を市街地（シティ）が管理し、彼らの養育に用いたもの。孤児が成年に達したとき、余剰の財産があれば受け取る権利が発生する。しかし基金が生む利子については、孤児が受け取ることはできなかった。そのためこの基金は市街地（シティ）の重要な資金源でもあった。大火からの復興のため、実際に市街地（シティ）は孤児救済基金を投入したが、**1680** 年には基金が破綻してしまった (**Backscheider 78**)。

はただの伝聞だ。[5]

たしかなのは、貧民、といっても前は肉体労働や小売業で生計を立てていた家の大多数が、いまや義援金で生きていることだった。こうした人たちを助けるために、思いやりの深い善良なキリスト教徒が施した莫大な金がなければ、ロンドンは決して持ちこたえられなかった。この義援金について、また行政府による分配の公平さについて、きっと記録がつけられたはずである。けれどもこの分配に携わった役人の多数が死んでしまっていた。しかもちょうど翌年に起きた大火は市の財政局の建物にも及び、多くの書類が燃えてしまったので、証拠となる記録はほとんど失われてしまったそうだ。だから、発見しようとずいぶん努力したものの、ぼくは具体的な記録を入手できなかった。

けれども、同じような病がまた襲来するのに備え（神よロンドンをお守ください）、次のことは心得ておくべきだろう。すなわち、当時の市街地の首長（ロード・メイヤー）と大物市議が、貧民救済のために多額の金を毎週気をつけて分配してくれたおかげで、これなしでは破滅していた多くの人びとが救われ、命をつなぐことができたのだ。ここで当時の貧民の実情と、なにが問題視されたかを手短に述べさせてほしい。そうすることで、今後同じような災害にロンドンが見舞われた場合になにが起きるか判断できるだろう。

ペスト流行の初期、もはや全市に伝染することは逃れられなくなると、前にお話ししたように、地方に友達や土地を持つ人はみんな家族を連れて避難した。まさにロンドンそのものが門から脱走し、誰ひとり後には残らないんじゃないかとさえ思えた。当然のことだけれど、この時を境に、生きるのに最低限必要なものを除き、まるですべての取引が終止符を打たれたようになった。

これはまさに生活に結びついた話で、ここには人びとの本当の姿がありありと示されている。だからどれだけ細部まで分け入ってもよいだろう。そういうわけで、このときすぐに窮地に陥った人びとをいくつかの職業あるいは階級に分けてお話ししよう。例えば――

1. あらゆる製造業の親方衆。とくに装飾品、さらに衣服や家具でも必需品とは言えないものを作る人たち。例えばリボン織り、その他の職工、金銀のモール編み、金線・銀線の紡ぎ手、お針子、婦人帽の職人、靴職人、帽子職人、手袋職人。同様に布張り職人、木工職人、家具職人、鏡職人。さらにはこれらの製品と関わる数えきれない職業も。まさにこれらの親方衆が仕事をやめ、お抱えの徒弟や職人、その他すべての働き手に暇を出した。
2. 商売が完全に停止した。というのも、テムズ河を上ってくる勇気のある船はほとんどなかったし、出て行く船は一艘もなかったからだ。おかげで税関の臨時職員はもちろん、水夫、荷馬車の御者、荷揚げ人夫など、取引業者の許で働いていた貧しい人びとも、一人残らず直ちに解雇され、仕事にあぶれてしまった。
3. 普段は家の新築や修理を担っていた職人も、完全に休業状態だった。何千もの家からどんどん住人が消えているのに、家を建てるどころの話じゃなかったからだ。家が

[5] **Landa** によれば、ペスト流行時に国王チャールズ二世が貧民救済のため多額の金を投入した証拠はない。イギリス議会もとくに対策を講じなかった（**Landa 274**）。

建たないというだけで、これと関連するふつうの業者もすべて仕事を失った。例えばレンガ職人、石工、大工、木工職人、左官、ペンキ屋、ガラス職人、鍛冶屋、鉛管工など、家に関係するあらゆる労働者に累が及んだ。

4. 水上の交通が途絶え、前のように船が来ることも出て行くこともなくなった。それで水夫はみんな失業し、多くの者は最低最悪の生活苦に落ちこんだ。水夫だけでなく、船の建造や設備と直接・間接に関わる各種の職人や商人もみんなおなじことだった。船大工、水漏れを防ぐコーキング工、縄綯い、乾物用の樽職人、帆を縫う職人、碇製造工、その他の鍛冶工。索具用の滑車の製造者、[6] 彫刻工、鉄砲鍛冶、船相手の商人、船首の彫刻工などである。いま挙げた職種の親方は蓄えで生きていけたかもしれない。しかしあらゆる取引業者が一斉に手を引いたので、すべての職人が首を切られる羽目になった。これに加え、テムズ河は小舟さえ走らないありさまだったので、水夫、はしけ船頭、小舟大工、はしけ大工は、ほぼ全員が仕事を失くし、解雇されてしまった。

5. どの家庭もできるだけ生活を切り詰めていた。逃げた家族も留まった家族もおなじだった。数えきれないほど多くの召使い、下働き、小売商人、職人、商店の帳簿係といった人びと、なかでも気の毒なことに女の奉公人がお払い箱となった。まさに孤立無援となり、仕事もなければ棲み家もなくなってしまった。これは本当に悲惨というしかなかった。

（東京大学准教授）

＊ダニエル・デフォー『ペストの記憶』（武田将明訳）は「英国十八世紀文学叢書」の一巻として研究社より刊行する予定です。

6 原語は **Block-makers.** 船の索具（綱）に取り付ける滑車（**block:** 写真参照）を作る職工のこと。